



生活

防災型「お薬手帳」活用

県薬剤師会がアドバイス

持ち歩く習慣を



防災訓練で拡声器を使いお薬手帳について話す石川優子さん=静岡市内

防水紙の表紙はタイト
ルが蛍光印刷され、暗
がりでも探しやすい

県版お薬手帳(名称は「わたしのお薬手帳」)は、救護に当たる医師等医療関係者の間で有用性が注目されたことがきっかけの一つとなり、生まれたという。「カルテも処方箋も流されてしまい、被災者が持っていたお薬手帳が非常に役立つ」と言われた。被災した人は避難所を点々と移動

東日本大震災の経験を生かして県薬剤師会、県医師会、県歯科医師会、県健康福祉部の4者が共同作製した防災型「お薬手帳」の配布が始まつて1年。既に34万6千部を供給し、全国的な評価も高い。震災から2年前に、あらためて手帳の有効な活用法を県薬剤師会前副会長の石川優子さんに聞いた。

させられ、医療者も短期で変わる。お薬手帳に正確な情報があれば、それを共有でき継続的な治療ができる

4者協議会を設立して

検討を重ねただけに、医

師と歯科医師の視点が盛

り込まれ、医療リスク情

報が一目で分かるようにな

っている。表紙を開いた左ページに名前、血液

型、緊急時連絡先、副作用

歴、アレルギー歴を書く

欄があり、右ページには

「抗リシン剤禁忌」「抗凝

固剤の服用」など医師が

チェックする欄と、歯科

装着記録欄がある。

「メモ」お薬手帳は、医療機関から処方された薬の服用履歴などを記録するもので、医薬品の相互作用・重複投与・副作用の防止などの医療安全の向上につなげる目的がある。薬局などできめ細かな形式の手帳が提供されている。県版は県内共通という長所があり、薬局や病院、診療所、歯科診療所で入手できる。

「東日本大震災では義歎を失った人も多かった。どの部位に、いつ作った医薬品の情報になる」

以降のページには、医療機関や薬局で調剤した医薬品の情報を書いても受診した時の待ち時間に、薬の豆知識や防災情報を見てほしい。繰り返し読むことで基本的な知識が身に付くはず」

石川さんは、今後の取り組みとして防災訓練への導入を提案している。「各自がお薬手帳を携帯し、医療者が活用する流れを体験してもらうことでも、より身近に感じられると思う」

く、外出先で体調が急変した時、会話ができない状態であっても手帳が状況

を物語ってくれる。バッ

グに入れて常に持ち歩いてほしい」

日常で体調が悪くなつた時の様子、受診の際に聞きたいことなども手帳

にメモしておけば、健康

状態を把握しやすいとも

言う。巻末に、災害時の